

藤原貴則「盛岡市桜山地区整備問題—観光産業の近隣住民に及ぼす問題について—」

今年の4月からNHKで放送されている連続テレビ小説「あまちゃん」が非常に話題になっている。テレビの視聴率はもちろんのこと、サウンドトラックなどの関連商品の売れ行きも、連日ニュースで大きく取り上げられている。物語の舞台「じぇじぇじぇ！」という独特の方言がある岩手県南三陸への観光産業の影響も大きなものだ。私の故郷は「あまちゃん」の舞台と同じ岩手県の盛岡市であり、ふるさとの方言があちこちで聞こえ、話題となっているのは嬉しくもあるが、不思議な気持ちになる。

しかし、特定の地域が話題となり、急速な観光地化が進むことは、その地域にとってプラスになることが大きい反面、地域住民の生活に大きな変化を与えるという問題もある。私が暮らしていた盛岡市では平成22年10月に、街の中心部にある桜山商店街の土地整備に関する「桜山参道地区の将来像について」という計画案が出された。その内容は、戦後の闇市から発展した桜山地区の商店街エリアを区画整備し、観光客向けにこの地区にかつてあった史跡を復元しようというものである。この計画案は、当時大きな反響が起り、大規模な説明会や反対署名活動へと発展した。

もともと、盛岡の大通りは観光客の減少が問題となっていた。メインストリートは空きテナントの看板と、中央資本のチェーン店の飲食店ばかりが並び「ここでなくてはならない」と言えるようなものがない。一方、桜山商店街は、盛岡の中心街でありながら古くからの街並みが広がり、全国的にも有名な老舗や、個人経営の個性的な店舗も多い。また、地域住民の高齢化と世代交代が進んだことで、地元の若者が新しく始めた飲食店や雑貨屋、洋服屋なども数多くある。若者が地元で自分の夢に挑戦する場所、としての意義も大きい。なぜ閑散として個性のない大通りを活性化させる努力をしないで、歴史と新しい風が混同する桜山商店街をつぶそうとするのか、私には全く理解ができなかった。

平成22年当時、私は宇都宮大学に進学し宇都宮市に住んでいたため、直接説明会や現地での活動に参加することはできなかったが、宇都宮大学の盛岡市出身の学生を中心に、区画整備反対の署名活動を行った。サークルや学生の協力を得て、約50人分の署名を集め、桜山商店街で商店を経営する友人を介して市に提出してもらった。盛岡市には3万3,010名の反対署名が集まり、現在、桜山商店街の区画整備案は白紙の状態となっている。

今回の「あまちゃん」ブームは震災の復興が進む岩手県にとって、観光業の活性化などで、プラスに働く面が非常に大きいだろう。それは同じ岩手県民である私にとっても非常に喜ばしいことである。しかし、急速な観光業の活性化は、時として地域住民の民意に反するものになってしまうこともある。そうした発展の仕方は、自治体にとってはプラスであっても、そこに住む人々のためにはならない。観光に対する取り組みは、自治体が、地域住民と協力して観光業を推し進めることが重要であり、忘れてはならないことであると思う。